「樹齢300年の木が500年もそこにじっと立っている」

宮大工

●伝統的な木造建築の基礎部材で、軒反り（のぞり）の調整に配置される隅木（すみき） ●仕口を強め、断面しを差し込み、ほぞ組みをしていく柱材。立てる位置により9～4カ所の仕口が造られます。❸柱のほぞ穴に「ひらき」を差し、その上に丹が載り、斜差しが差し込まれ、くさびが打ち込まれています ❹金剛寺の建築財料。建に柱を立て、くぎ一本使うことなく木を組み、くさびで固定しています木造建築が密々と並んでいます

宮大工の道具。上から鑿（のみ）、木の表面を削る手斧（ちょうな）、墨金（まがりかね）尺、墨壺

沖縄ではあまり例をみない職種ですが、神社や寺の建築、文化財の補修を専門とする「宮大工」と呼ばれる大工がいます。京都・奈良の寺の補修現場を任され、台風の復元にもかかわった福岡県出身の宮大工・西岡常一さん（一九八六）を育てた安田寺建設現場に訪ねました。

大工であった西さんの父親がわが子を一人前の職人にするため、友人である寺社の棟梁に預けたのが二十二歳の時。大工の世界は厳しく、後片付け、鉋（かんな）や鑿（のみ）を研ぐことなど下積みの修行が続きます。やっと一人前の宮大工として認められたのは長崎県の宗像神社や地元の常盤神社などを手掛けた二十六歳のときです。

特に六年間、本格的な和風住宅の建築で初めて独り、秋葉区馬場の建築現場を手掛け、現在安国寺本堂を建築中。その後に宮古島市の神社、薩摩寺の鐘楼などの仕事が控えています。

言うまでもなく、大造建築は木を選ぶことが大事な仕事で、特に柱などは樹齢二百年以上の大木が使われます。先人は木を選び、切り出す時期を「木六竹八」と言い伝えています。木は秋冬の休眠期をする四月の六月に、竹は八月の新芽に切ると虫もよいという教えで、旧暦だけで木を選定するのではなく、切る時期に合わせれば「樹齢五百年のヒノキで建てた柱は千年は持つ。だから木を選ぶ最かな日が大事」と西さんは言います。

安国寺の建材のヒノキを求めてラオスに渡った西さん。選び抜いた木材を前に「真っすぐに立っているように見えますが、木にはそれぞれ癖があるので、その木の癖をよく見抜いて組んでいくのです」と語ります。

こうして選んだ木材を柱や梁、壁に加工していくのですが、その時最も発揮するのが曲金（まがりかね）尺。その目盛りには表目と裏目とがあり、表目には表の四倍の目盛りが刻まれています。その曲金尺で計算し、加工を指示すると、職人の大工たちが木を削り、穴を掘り、柱と桁を組み、彫刻が施された一花木（いっかぼく）と組み合わせていくのです。

●西岡常一棟梁の建立の際、コンピューターで計算した設計図を見て、「これでは施工に一寸五分の狂いが生じてくる」と木組した西さん。設計者は聞き入れてくれなかったと言います。しかし、曲金尺を手にした西さんの予測通り、一寸五分の狂いが生じてしまったそうです。宮大工の高度な技術を物語るエピソードの一つです。

「わずかな違いも許されませんよ。貴重な何百年という木材を使うのですから、隅の隅かな大工に予算く。しかも慎重に加工してもらう。現場や分からない事は教えていく」と語るその現場では十五人ほどの大工が二組に分かれて作業しています。大きな柱を立てるときには自然とみんなが一カ所に集まり、隅のほぞ穴に巨大な柱を立て、先に立てた柱との間に梁を渡していきます。西さんは「木を組み合わせ、くさびを打ち込むと逆三角形の『ありがほぞ穴に食い込んでいき、動かなくなる。木造建築は木を組んでいく仕事である。だから、寸法で組まずに木の癖で組めといわれている」と語ります。